

視覚的快感のあるうれしい街に

田島 恭子（鶴見区 31歳）

経済大国日本も、社会福祉や環境対策となると、決して先進国とはいえません。文明開化の草分けで、ハイカラな街であった横浜は、開港百二十周年の今や日本第二の大都市であり、これからは他都市をリードしてゆくような真の意味での先進都市になる使命があるのではないのでしょうか。遅れている社会福祉を引き上げ、公害対策にも大いに力を入れ、人間の生きる場としてふさわしい都市へと向かって欲しいものです。

また一方では、総体的に街の美観を高めて美しい横浜にしてゆくことも、忘れてはなりません。横浜のイメージを「汚れた街」とする者が、市政モニターアンケートによると半数を越えています。「さわやか運動」によって道路上のゴミ等目立たなくなれば大いに結構なことですし、海や河川の汚れは、下水道整備等で改善されてゆくのでしょうか。

さて、タウンスケープ（都市の景観）はどうでしょう。

実際に住んでいて、横浜は美しい街と言えますか。日本で

は衣食に比べて住が劣っている事は、だれしも認めるところですが、この街をよく見直してみましよう。近来、大通り公園、馬車道、伊勢佐木町モール等都心部では、よく整備されてきましたが、その他の商店街や住宅地はどうなっていますか。日本でもようやく始まり出している街並み保存という概念は、決してただ古い歴史的街並みだけに固執するものではなく、今すでにある街並みを、どう生かして使っていくかということなのです。外国の街の調和のとれた美しさを思い浮かべてみましよう。例えばイギリスにしても、産業革命で人口が急増し環境の荒廃を経験して、市民が環境に関心を持ちはじめた景観を美しくする意識が高まり、各種保存活動、街並みの色彩調整や広告物規制等かなりの成功が見られます。住民と行政側が真剣に取り組めば、わずか数年で見違えるほど効果のあがるものなのです。商店街では看板や広告の位置を揃えてゆくなり、既存の住宅地でも、塀を建て替えるなら生け垣にするとか、ほんの些細な事から、自分の服装をかまうセンスで注意してみれば、意外と簡単に、視覚的快感のあるうれしい街になるはずですよ。

ある程度のエチケットをわきまえてこそ、個人の自由が

あるのですから、楽しい協定や住民憲章を考えてみてはどうでしょうか。

このままでは横浜は醜い大都会になってしまいます。都市は文明の象徴ですから、機能的でかつ「美しい横浜」になりますように。

(建築士・市政モニター)

「横浜」にこった煮の味

青木 雨彦 (保土ヶ谷区 46歳)

わが街、横浜のことを「料理にたとえれば、大きな鍋にいろんなものがぶちこまれていて、そのごった煮を誰に遠慮もなく、好きだけドンプリにとつて食べられる気ままさがある」と評した友人がいる。どう考えても「美しい皿に盛られた一品ずつが次々に出てくるのを、かしこまって賞味する風情ではない」というのだ。

くやしいけれど、当たっている。たとえば、横浜に生まれ、育った文学者たちをみても、長谷川伸、大佛次郎、吉川英治、獅子文六というふうに、みんな大衆作家だ。これに、横浜で後半生を送った山本周五郎さんを加えれば、そ

のまま日本の大衆文壇の系図ができてあがる。

ビールじゃあるまいし、文学に「純ナマも本ナマもあるものか」というのがわたしの持論だが、この国にはヘンな習慣があって、たか・が・文・学・でも「純文学」と「大衆文学」に分けたがる。そうして、純文学とやらを上置き置きたがる。

しかし、そうだろうか？ ホントに、純文学のほうが大衆文学より上等だろうか？ 文学賞で言えば、純文学は芥川賞で、大衆文学は直木賞だが、ちかごろでは、芥川賞作家より直木賞作家のほうが活躍しているのではなからうか？

その直木賞に由縁ゆかりの直木三十五も、じつは横浜を愛した作家だが、このように大衆作家が輩出するのも、ごった煮の街なればこそだろう。純文学みたいに、とりすましたとこないのが、横浜の魅力だ。

だから、横浜の人間には「三代つづかなければ、ハマッ子じゃない」といった気負いはない。わたし自身は、横浜に生まれて、横浜で育った人間だが、北海道で生まれた人も、九州で生まれた人も、いや、アメリカに生まれた人だって、横浜に移り住んだら、その日からハマッ子だろうと思っっている。